

紹介

本村凌二編著

『ローマ帝国と

地中海文明を歩く』

以前、紹介者がカルチャーセンターで西洋古代史の講座を担当した際、ある受講生が自身の受講動機として「ヨーロッパに旅行したとき、一般のガイドブックや、通了一遍の知識とは違った角度から旅行を楽しみたいから」といった主旨のことを口にされたことがあった。西洋古代史、あるいはもっと広く西洋史や歴史全体に対して、このような関心が社会に少なからず存在していることは多くの方も実感されているところではないだろうか。

本村凌二氏の東京大学退職を記念して編まれた本書はローマ帝国と地中海文明の遺跡を解説した一般向けの書物であり、まずはそのような関心に応えることを目的としたものと言つてよいだろう。だが、本書を手にとつてまず驚かされるのは、その対象とする都市・地域の多さである。東はバビロンから西

はアンダルシアまで、北はエディンバラから南はルクソールまで、全二一章それぞれが異なる都市・地域を扱っている。さらに注目すべきは、編者でもある本村氏の「まえがき」にある通り、本書が「アカデミック・ガイドブック学術的観光案内書」たることを目指したということである。現在では大学院生の段階であつても海外に渡航して調査することは珍しいことではなくなつたが、それによつて得られた映像記録・見聞を専門研究だけでなく一般にも活用して、学術的な観光案内書が作れるのではないかという着想によるものだという。本書が類書と大きく異なるのはこの二点、つまり対象とする都市・地域の多さと、そのすべてを本村氏の薫陶を受けた各執筆者が自身の目で見、その足で歩き、その手で記録したものに基ついて平易に解説していることである。

本書にはまさにガイドブック然とした章もあれば、現在の遺跡の姿から往時の姿を偲ばせるのみならず、遺跡がたどつた紆余曲折の歴史に思いを馳せるもの、遺跡と文献史料を重ね合わせながら思考の旅路に誘うものなど様々な文章が並ぶ。執筆者が「アカデミック・ガイドブック学術的観光案内書」という言葉をそれぞれに解釈したことは一般の読者にとって本

書をさらに魅力的なものとしていふ言つてよいだろう。

一方、一専門研究者である紹介者が、本書によつて考えさせられたのは、学問研究と一般向け書物の関わり方であつた。学問の「余滴」の公開でもなく、「啓蒙」書でもなく、それでいながら専門研究者の手でしか著せないような「一般書」を模索すること。

高所より論じ教えるのではなく、一般の関心に寄り添いながら、それでいて、そのような関心のあり方からは気づくことのできない視点を提示すること。このことは、(とりわけ人文系の)学問分野が社会に対して有する存在価値の一端を示すばかりでなく、学問のすそ野を広げ、専門研究それ自体を活気づけることにもつながっていくのではないだろうか。本書にはそのような「一般書」の可能性を感じるところがあつた。本書をこのように捉えることは編者・執筆者の意図を違へることになるかもしれないが、一読者として紹介者が本書でたどつたのは、そのような思いを抱えての旅路であつた。

(四六変型 四一五頁 講談社 二〇一三

年四月 税抜二六〇〇円)

(佐野 光宜 京都女子大学非常勤講師)